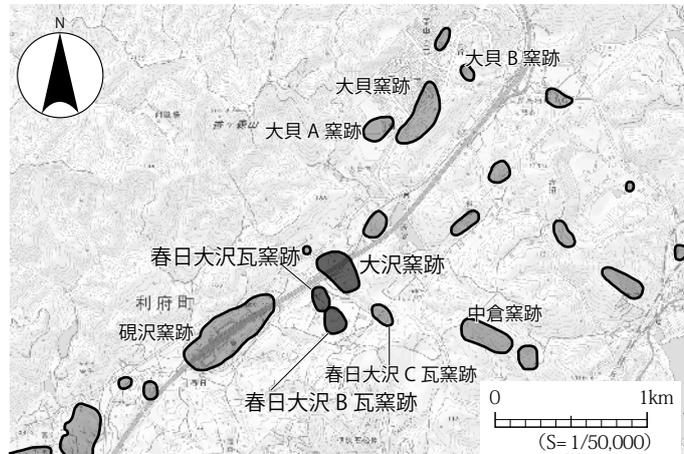


- 所在地** 宮城県利府町春日字大沢
- 立地環境** 松島丘陵から派生した標高
60 mほどの丘陵斜面
- 発見遺構** 須恵器窯、瓦窯、竪穴建物、
土坑
- 年代** 8世紀前半（須恵器窯）
9世紀後半（瓦窯）



第1図 大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡の位置

遺跡の概要

大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡は仙台平野の沖積地から4 kmほど北東に入った、標高60 mほどの丘陵上に所在する（第1図）。付近の丘陵地帯は大小の沢が多方向から入り組んだ複雑な地形をなしており、沢に面した斜面上に多数の窯が分布している。周辺には「瓦焼場」の地名が残り、当地で多賀城の瓦を焼成したことが古くから知られていた（文献16）。これまでに実施された村主岩吉（文献19）、東北帝国大学（文献12）、古窯跡研究会（文献22）、宮城県教育委員会（文献15）の調査により窯の分布が捉えられ、それらは現在、大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡・春日大沢B瓦窯跡として遺跡台帳に登録されている。これらのほか、周辺の丘陵上には硯沢窯跡・大貝窯跡・中倉窯跡などが所在し、春日窯跡群を形成している。古代の遺構は、大沢窯跡で須恵器窯2基、瓦窯7基、竪穴建物1棟、土坑18基が（文献15）、春日大沢瓦窯跡・春日大沢B瓦窯跡で半地下式の瓦窯5基が検出されている（文献12）。

規模・構造

須恵器窯（大沢A2・A7b号窯：第2図、第1表）

いずれも半地下式窖窯で焼成室から燃烧室にかけての平面形は長方形と推定される。近隣に所在する硯沢窯跡の半地下式須恵器窯と比較すると、大沢窯跡の2基は全体が長方形で燃烧室が短いのに対し、硯沢窯跡では焼成室が若干膨らみ燃烧室が長い（文献15）。

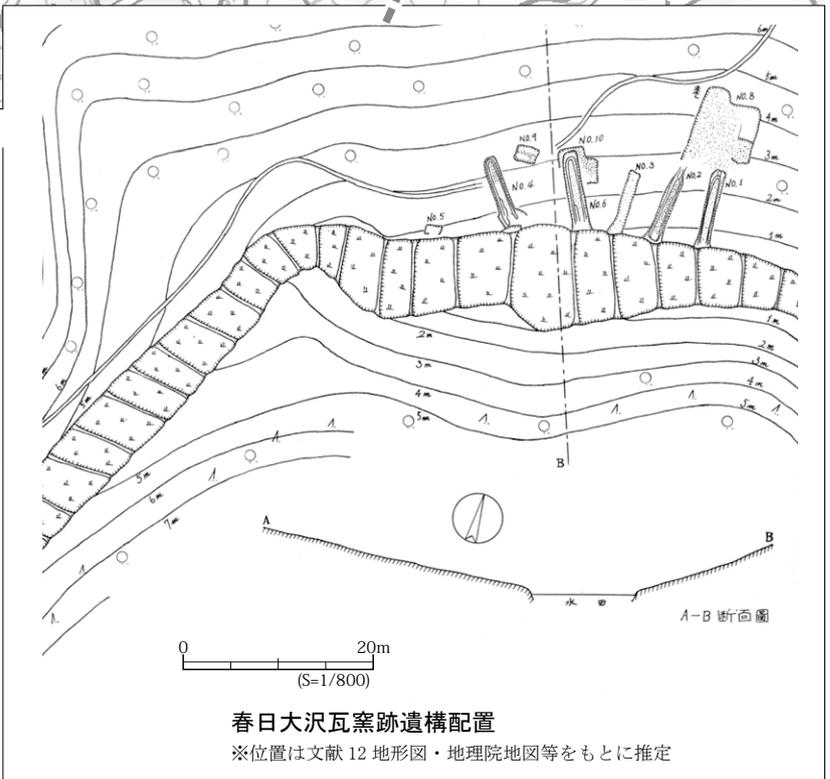
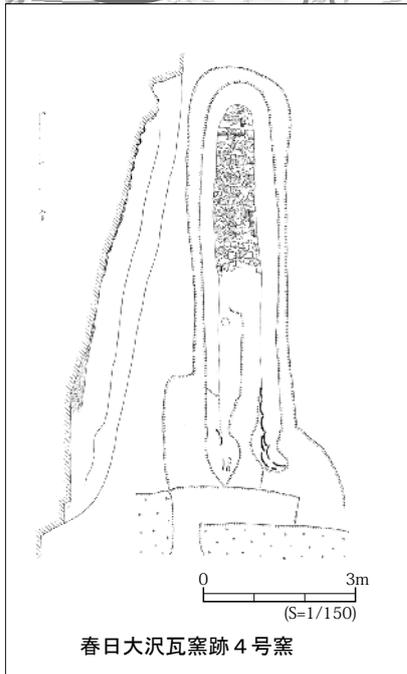
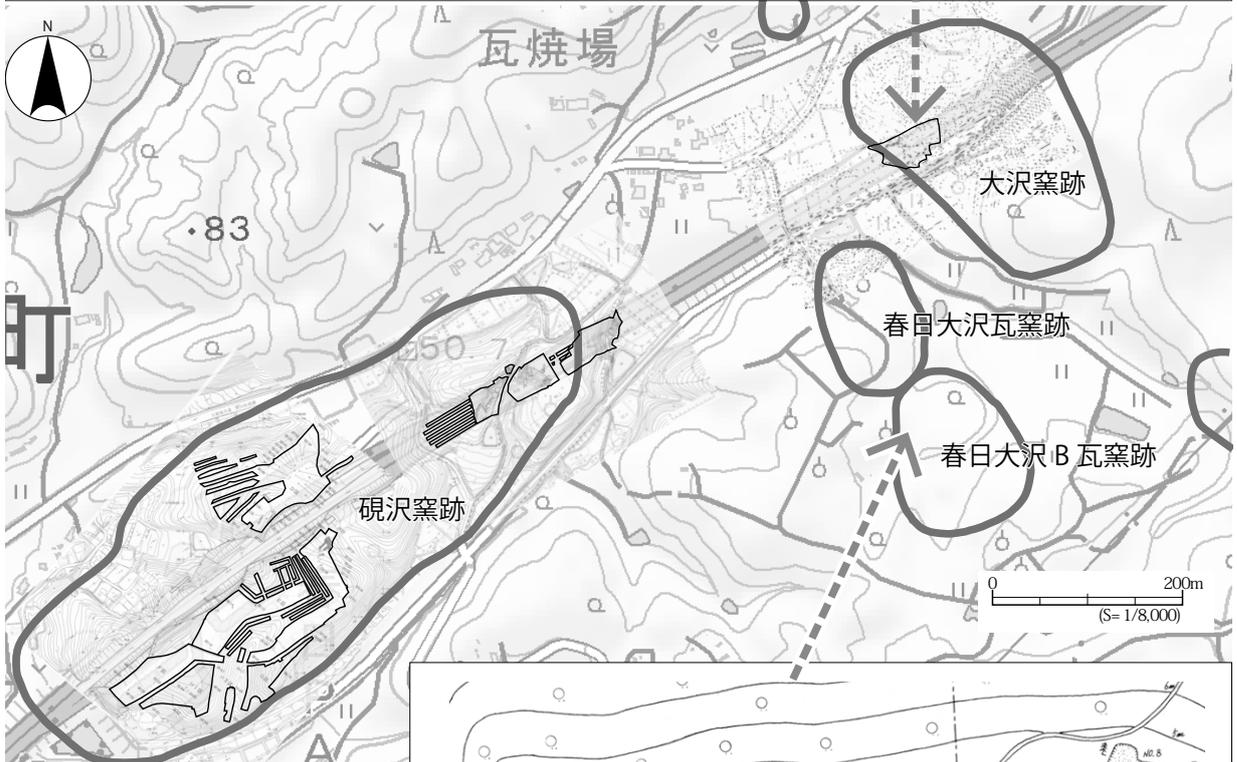
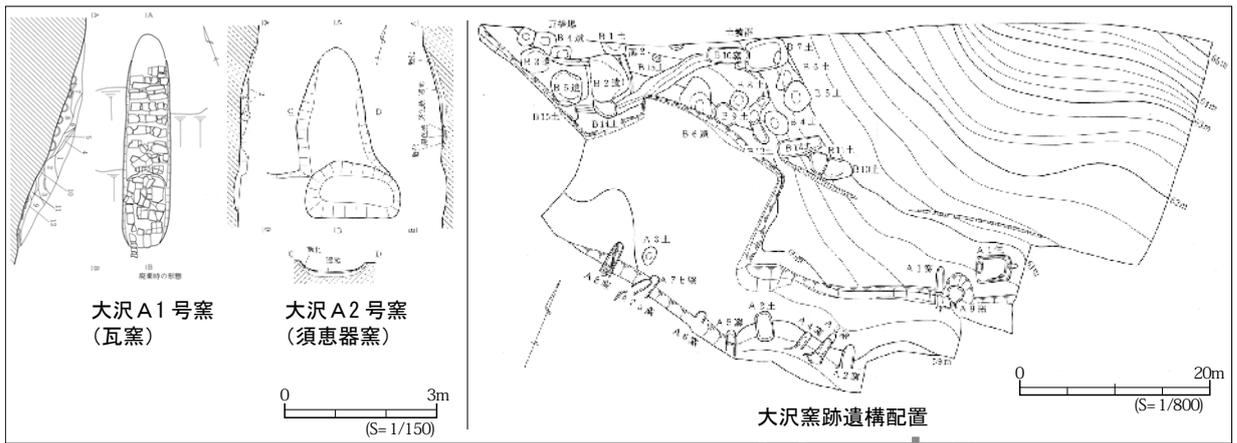
瓦窯（春日大沢瓦窯跡第1～4・6号窯、大沢窯跡A1～6・A7a・A8号窯：第2図、第1表）

春日大沢瓦窯跡は半地下式無階無段、大沢窯跡の瓦窯は半地下式有階無段の窖窯であるが、焼成部床面に丸・平瓦を階段状に並べて焼台を形成した窯が多く認められる。窯体内や前庭部に排水溝が伴うものがあり、A1・A7a・A8号窯では排水溝に丸瓦などを架構し、暗渠としている。

木炭窯 B10号窯は平面形が長方形を呈する点では、平安時代の木炭窯である硯沢窯跡A3・7号窯と類似するが、時期は不明としている（文献15）。

出土遺物（第3・4図）

須恵器 大沢窯跡の須恵器窯では坏・高台坏・甕・鉢が出土している。坏は体部下位に稜をもち、稜から上が直線的に立ち上がり、底部全面～体部下端に手持ちヘラケズリを施すものが多い。ただし、体部下端に弱いくびれを持ち底部ヘラ切り後底部・体部下位に回転ヘラケズリを施すものや、底部回転糸切り→周縁手持ちヘラケズリのもの、底部静止糸切り無調整のものもある。年代は8世紀第1～第2四半期とされている（文献11）。



第2図 大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡遺構配置図 (文献12・15から作成)

軒瓦 春日大沢瓦窯跡では細弁蓮花文軒丸瓦（多賀城分類 310B）と均整唐草文軒平瓦（同 721B）が出土している（文献 12）。大沢窯跡では 721B が出土しており、重弁蓮花文軒丸瓦（同 431）が表採されている（文献 15・22）。なお、721B は顎面が無文の 721B-a タイプである。310B と 721B は多賀城政庁第Ⅳ-1 期（貞観 11 年〔869〕地震直後の復興期）に、431 は多賀城第Ⅲ期に位置づけられる（文献 17）。

丸瓦 粘土紐巻き作りで有段（玉縁式）のもので、凸面調整は縄叩き→ナデである。多賀城分類では丸瓦Ⅱ B-a タイプに該当する。

平瓦 製作技法は一枚作りで、大沢窯跡では広端幅 24cm、狭端幅 21cm、長さ 34cm 程のものが一般的とされる。調整の違いから、平瓦は以下の 2 種類に大別される。

I 類：布を敷いた凸型台上で凸面を縄叩きし、側面・小口面をヘラケズリするもの（多賀城分類Ⅱ C 類）

Ⅱ類：布を敷いた凸型台上で凸面を縄叩きした後、布を敷かない凹型台上で凹面にナデあるいはヘラケズリ調整を行い、側面・小口面をヘラケズリ調整するもの（多賀城分類Ⅱ B 類）。ただし凹型台上に置かれた後、凹面調整を省略して側面・小口面をヘラケズリ調整するものもある。

上記の平瓦のうち、大沢窯跡では I 類が 6 割強を占めるのに対し、近隣の硯沢窯跡ではⅡ類が 7 割を占める。ただし大沢・硯沢いずれの窯跡でも I 類・Ⅱ類は共伴しており、多賀城第Ⅳ期の平瓦には I 類（多賀城分類Ⅱ C 類）とⅡ類（同Ⅱ B 類）が併存したことが明らかとなった（文献 15）。

供給先

細弁蓮花文軒丸瓦 310B、均整唐草文軒平瓦 721B の同範瓦は近隣の硯沢窯跡（310B・721B、文献 15）や、台原・小田原窯跡群の五本松窯跡（310B・721B、文献 4 ほか）、安養寺中囿窯跡（310B・721B、文献 4）、与兵衛沼窯跡（721B、文献 10）などでも出土している。また、消費地では多賀城（文献 17 ほか）、多賀城廃寺（文献 3）、陸奥国分寺（文献 2）、燕沢遺跡（文献 14）で出土している。それぞれの需給関係には検討の余地があるものの、窯跡群の地理的關係や生産瓦の内容（範種の多寡や出土量の比率等）に鑑み、多賀城第Ⅳ期には春日窯跡群が多賀城・多賀城廃寺へ、台原・小田原窯跡群が陸奥国分寺・国分尼寺・多賀城・多賀城廃寺へ瓦を供給したことが想定されている（文献 13・20）。

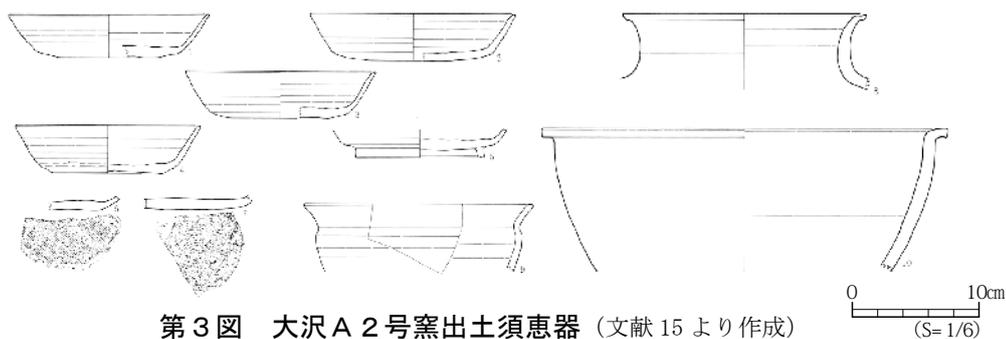
関連文献（「大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡」「硯沢窯跡」「大貝窯跡」共通）

- 1 渥美賢吾 2007 「東国における古代須恵器窯の構造変化とその特徴 - 茨城県木葉下窯跡群の分析から -」『窯跡研究』第 2 号 窯跡研究会
- 2 伊東信雄編 1961 『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』宮城県教育委員会
- 3 伊東信雄編 1970 『多賀城跡調査報告Ⅰ—多賀城廃寺跡—』宮城県教育委員会・多賀城町
- 4 古窯跡研究会 1973 『陸奥国官窯跡群—一台の原古窯跡群発掘調査研究報告—』古窯跡研究会研究報告第 2 冊
- 5 古窯研究会 1976 『陸奥国官窯跡群Ⅱ』古窯跡研究会研究報告第 4 冊
- 6 古窯跡研究会 2009 『陸奥国官窯跡群Ⅶ 仙台市安養寺下瓦窯跡調査報告書—陸奥国分寺・同尼寺創建期の瓦窯跡—』仙台育英学園高等学校研究紀要第 24 号
- 7 櫻井友梓 2009 「多賀城周辺地域の須恵器窯構造」『宮城考古学』第 11 号
- 8 菅原祥夫 2010 「第 3 部第 11 章 東北」窯跡研究会編『古代窯業の基礎研究 - 須恵器の技術と系譜 -』真陽社
- 9 仙台市教育委員会 2008 『神明社窯跡』仙台市文化財調査報告書第 232 集
- 10 仙台市教育委員会 2010 『与兵衛沼窯跡』仙台市文化財調査報告書第 366 集
- 11 東北古代土器研究会 2008 『東北古代土器集成—須恵器・窯跡編—（陸奥）』
- 12 内藤政恒 1939 「宮城縣利府村春日瓦焼場大沢瓦窯址研究調査報告」『東北帝國大學法文學部奥羽史料調査部研究報告 第一』
- 13 内藤政恒 1964・1965 「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦」（Ⅲ）（Ⅳ）『歴史考古』第 12・13 号
- 14 原田良雄編 1974 『内藤政恒先生蒐集東北古瓦図録』
- 15 宮城県教育委員会 1987 『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 116 集
- 16 宮城縣史蹟名勝天然紀念物調査會 1927 『宮城縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第三輯』
- 17 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡本文編』

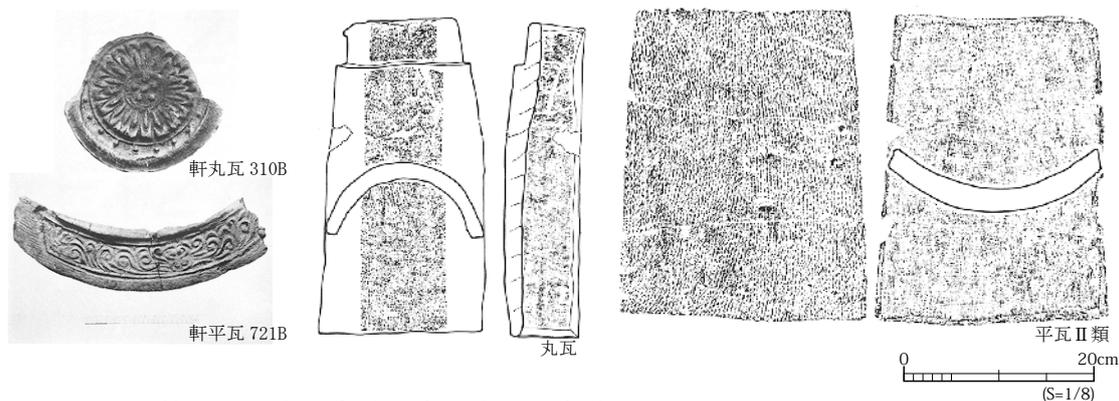
- 18 村田晃一 1992 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯跡群検討会
- 19 村主岩吉 1927 「多賀城瓦窯址」『考古學雜誌』第 17 卷第 8 號
- 20 柳澤和明 2013 「多賀城・多賀城廃寺・陸奥国分寺—貞観地震による被害と復興—」『古代の災害復興と考古学』高志書院
- 21 利府町教育委員会 1980 『利府町の文化財めぐり』
- 22 利府町教育委員会 1991 『春日窯跡群』利府町文化財調査報告書第 7 集
- 23 利府町教育委員会 2004 『大貝窯跡群』利府町文化財調査報告書第 12 集
- 24 利府町教育委員会 2011 『硯沢窯跡Ⅱ』利府町文化財調査報告書第 13 集
- 25 利府町教育委員会 2017 『硯沢窯跡Ⅲ』利府町文化財調査報告書第 15 集
- 26 渡辺一 2006 『古代東国の窯業生産の研究』青木書店

遺跡名	遺構名	構造	性格	年代	全長	焼成部幅	燃焼部幅	煙道	床面傾斜	床面枚数	備考
春日大沢瓦窯跡	第 1 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(7.187m)	0.85m	約 1m	-	約 18°	-	焚口側壁を平瓦で補強する
	第 2 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	-	0.65m	約 1m	傾斜	18~20°	-	丸瓦・平瓦を階段状に並べた焼台を構築
	第 3 号窯	半地下式	-	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	-	-	-	-	-	-	-
	第 4 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	約 7.6m	0.825m	-	-	平均 15°前後	2	焚口側壁を平瓦で補強 丸瓦・平瓦を階段状に並べた焼台を構築 前庭部中央に炭・灰の掻き出しまは排水の痕跡
	第 6 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(約 7.25m)	約 0.8m	-	傾斜?	15~20°	2?	-
	大沢窯跡	A2 号窯	半地下式	須恵器窯	8C 第 1~第 2 四半期	(2.6m)	0.8m	1.0m	-	-	1
A7b 号窯		半地下式	須恵器窯	-	(2.8m)	0.9m	0.8m	-	15~26°	1	天井崩落・埋没後に A7a 号窯を構築
A1 号窯		半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(4.2m)	0.8m	0.8m	-	約 21°	1	丸瓦を並列した焼台を 9 段構築 燃焼部 / 焼成部の境に段 燃焼部西壁沿いに排水溝を有し、上部に丸瓦を架構
A3 号窯		半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(3.6m)	-	0.9m	-	約 21°	1	燃焼部 / 焼成部の境に段 焚口~前庭部に排水溝が付属
A4 号窯		半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(2.4m)	-	0.8 m	-	-	1	燃焼部 / 焼成部の境に段 焚口付近~前庭部に排水溝が付属
A5 号窯		半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(2.7m)	0.9m	1.0 m	-	約 23°	1?	丸瓦を並列した焼台を構築 (下方部は平瓦で支持) 燃焼部 / 焼成部の境に段
A6 号窯		半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(1.4m)	0.9m	-	-	約 21°	1	-
A7a 号窯		半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(2.3m)	1.0m	-	-	約 16°	1	A7b 号窯の埋没後に構築され、焼成部が重複 丸瓦を並列した焼台を 5 段確認 燃焼部~灰原にかけて排水溝を有し、上部に瓦を架構
A8 号窯		半地下式	瓦窯	多賀城政庁第Ⅳ-1 期	(3.7m)	1.1m	1.2 m	-	約 13°	2	燃焼部に焼台瓦列が 7 段残存 1 次床面では燃焼部 / 焼成部の境に段 焼成部~燃焼部にかけて排水溝を有し、上部に瓦を架構

第 1 表 大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡 (文献 7・12・15・22 より作成)



第 3 図 大沢 A 2 号窯出土須恵器 (文献 15 より作成)



第 4 図 大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡出土瓦 (文献 12・15 より作成)